
紙飛行機の飛ぶ先に

やなぎさわゆきこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。「」の小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紙飛行機の飛ぶ先に

【著者名】

やなぎわわゆき

20803P

【作者名】

【あらすじ】
「好きだ」「
「いつから?」「
「中学一年のころから」「
「きっかけは?」「
「配られたプリントを紙飛行機にして飛ばしたとき」「
「おれの、どこがいいの?」「
「ぜんぶ」

「好きだ」

残り少ない太陽が、赤い陽光を斜めに投げる。教室にはもう誰もいない。おれと、こいつだけ。

「ジョーク?」

念のため、きいてみた。こいつのことは、小学校から知っている。友だちだつた覚えはないが、こんな田舎じや、知らない人間もいやしない。名前や顔を知つている、声を知つている、まあその程度の知り合いだが、記憶にある限りでは、ジョークとかいうやつじやなかつた。

「いや

「いつものお堅い顔で答える。

「じゃあ、同情?」

おれはつじやつたままで、職員室に呼び出しをくらつていた。今年三十回目の記念すべき呼び出しだ。進学がとか、若いうちはとか、よくわかんない言葉で熱く語る担任の前で、ほんやりと突つ立つていた。大人なんて、好きなだけ話させておけば、いざれ語り尽くして自己満足する。ほつとくに限る。職員室常連のおれは、一年の頃には、もう悟つていた。それに職員室はエアコンが効いていて、あつたかい。立つて立つて立つているだけで頭がぼーっとしてしまう。暖かい空気が上方にいくつてのは、真実だ。担任が「おれが高校受験のときはな」と昔話に入ったとき、こいつは、別の先生んとこにいた。先に用事を終えたこいつが、職員室から出て行くとき、おれと目があつた。切れ長の目が、おれをまっすぐに捉えていた。向けられた眼差しは、こいつもと変わりなく無表情なのに、なにかを含んでいる気がした。

「違う」

あの日に、哀れまれていていたのかと思った。ならば一発殴つてやれ

「おまえはなにを考えているんだ！」これまた熱血な若い体育教師が、授業に参加しないおれをみつけるたびに「うけれど、もつとわからんのは、田の前にいるこいつだぞ。どうしたらおれみたいなへラへラ笑つてるだけの落ちこぼれに好きだなんていえるんだ？」

でもわからないから知りたくなる。なぜなんだ？ と聞いたくなる。おれたちはそういう生き物らしい。本に書いてあつた。あの体育教師も、おれのことが知りたかったのだろうか。田の前のこいつをみてそう思つたけど、きっともう遅いのだろう。最近では、あまり話しかけてこなくなつた。「おまえ、言いたいことがあるなら、はつきりいつてみる。欲しいものはなんだ。やりたいことはなんだ」鬱陶しいくらいだったのに、それがある日なくなつていた。気づいたときには、遅いんだ。

「こいつから？」

「中学一年のこいつから」

「きつかけは？」

「配られたプリントを紙飛行機にして飛ばしたとき、どくんと心臓が鳴つた。たつたそれだけか？」

「おれの、どこがいいの？」

「ぜんぶ」

「バカだ、こいつ。

学年一、いや、県で一番の秀才、中屋敷葉は、目線を伏せるでもなく、恥じらいもなく、はつきりとそういった。

冷や汗が出た。中屋敷の頭良さそうな涼しげな眼差しに、じりじりとあぶられ、おれのヒットポイントはぐんぐん下がる。三分後、おれは膝から力が抜けて、その場にへたり込んでいた。武器も使わずに、視線だけでおれを倒すとは、あっぱれだ。

違うだろ。これはゲームじゃない。

自分で自分につつこんだ。賞賛している場合じやない。

中学もあと半年足らずで終わりだ。体育祭も文化祭も終わつた。

「おまえはなにを考えているんだ！」こいつが読めない。

なにもかも終わつたんだ。残すイベントは、受験と卒業式とうい苦痛だけ。周囲はすでに受験ムード全開で、焦り苛つきびりびりして。触れたらその瞬間に破裂し、碎け散る。そんな空氣をまとつたやつばかりが教室で呪文のように公式を唱えている。誰もが些細なことで憤るこの時期に、県ナンバーワンの秀才は、晚秋の夕焼けに満たされた教室で、受験をとっくに放棄したおれに告つたのだ。

秀才はやることが違つ。ちなみに、中屋敷は男だ。ちなみに、おれも男だ。

「菊池、大丈夫？」

中屋敷がかがみ込み、おれと目線を合わせる。大丈夫？ それはおれのセリフだろうと、中屋敷を見上げたら、そのまじめな顔はいつも通り涼やかだつた。

「おれよりバカがいるとは、思わなかつた」

今世紀最大のため息が出た。

「おれ、チャリなんだ。後ろ、乗らない？ 送るよ」

教室で告つたあと、中屋敷はそういった。確かにそういった。それなのに、これはなんだ。おれは中屋敷の自転車に乗り、後ろに中屋敷を乗せて、中屋敷の指示で右や左に進路をとり、おれんちとは正反対の方向にある中屋敷の家へと必死にペダルをこいでいる。

男に告白された直後、そいつにノコノコついていくおれもおれだが、気力体力ともに限界だったおれは、チャリの後部席という甘い言葉に、つい釣られてしまつた。おれの家は、学校から一つ山を越えた向こうにある。距離はそれほどないが、文字通り山を越えるので、行きも帰りも、まずは上り坂が待つて。それに今朝は身体がたるくて、大学に行くついでのねえちゃんに、車で送つてもらつたのだ。自分のチャリはない。当然、お言葉に甘えるだらつ。おれを好きならその愛の力で、あの坂道を登つてみる。

しかし、ノーマルでない愛の道は険しかつた。

古びた下駄箱の林立する昇降口で、中屋敷はちょっとした段差を

踏み外した。中屋敷の足首のあたりから、ビキといつ世にも恐ろしいなにかが壊れる音がした。

「いま、なんか、音が・・・」

今日、一度目の冷や汗が出た。おれは弱いのだ。人が怪我するとか、血が出るとか、そういうのにひどく弱い。

「したね」

「したねって、なんでそんなに冷静なんだ！　えーと、こいつにうときは保健室！　上野、いるかな。もう帰っちゃったかな」

保健室は、職員室に次いで、おれの行きつけである。保健医である上野は、男勝りのおばちゃん先生だ。サボリ目的で保健室を利用しようとして、出された湯飲みに漬けて水銀が限界まで上がった体温計を差し出して、頭を叩かれたのが馴れ初めだ。懲りずに三年間、通り詰めたおれは、すっかり茶飲み友だちになってしまった。上野が飼つてる猫と犬と山羊（なぜか山羊）の名前も、上野の庭に植わつてる野菜の種類まで知つてている。毎年夏にくれるトマトが、とんでもなく甘くてうまいんだ。

「落ち着けよ、菊池」

蹲つたまま動けない中屋敷を置いて、トマトへ、いや保健室へとダツシユしそうになつたおれを、中屋敷の冷静な声が留めた。

「落ち着いていられるか！　ビキつていつたんだぞ！　ビキつて」

「おれは、明日に試合を控えた陸上選手でもサッカー選手でもない。

大丈夫だ」

「痛くねえの？」

「痛いよ」

その顔があまりにも普段通り大人びているので、イラつときた。

「痛いなら、そういう顔しろよ！」

そういつたら、ほんの少しだけ、無表情を緩めて

「菊池は優しいね」

といつた。

どくんと視界が揺れた。一生の不覚。そんな言葉が頭に浮かんだ。

そのあとおれは、中屋敷を保健室に運び、でも上野はもう帰った後で、仕方なく、中屋敷のチャリでこいつを家まで送ることになったのだ。

黄色く枯れた田畠を吹き渡る寒風が、肌を刺す。顔は痛いけど、十五歳男子一人分の体重を載せてチャリを漕いでいるので、体内は発熱している。息が上がる。はき出した息が、もう白いことに気づいた。

「次を左に入つて。その先だから」

背中から中屋敷の声がした。おれは黙つて頷いた。

「ありがとう」

玄関まで送つていつた中屋敷がいつた。

「チャリ、借りてくぞ」

「いいよ。それじゃあ、また明日」

手を振ることもなく、中屋敷はそのまま家に入つてしまつた。おれは閉まつた扉の前で、動けなかつた。

おい。あつさりしすぎだろ。これがさつき告白したばかりの、そして家まで送つてやつた相手に対する態度か。おまえ、さつきおれに、好きだつていつただろう。

中屋敷の胸ぐら掴んで、一言いつてやりたくなつた。

秀才で、先生を含め誰からも一目置かれていて、当然のように班長、部長、委員長、生徒会長、とにかく長と名のつく役職をいくつも務めあげ、どんな問題も冷静に解決する。あまり笑わざいつも無表情だが、かといつて冷たいわけでもない。

それがなんだ、この冷たさは。普段、教室にいる中屋敷よりも、冷えてるじゃないか。

恋愛なんて、幼稚園の先生に「結婚してください」とみんなの前で大声で求婚した苦い青春の思い出以外、経験がない。姉やクラスの女子どもをみていて想像するに、もつとドキドキして、ベタベタして、ねばつこいもんなんじやないのか？ 希望的観測では、もつ

と甘いはずだ。

ふつつと、怒りが湧く。

「わけわからねえ」

玄関扉に向かって呟いた。再び、疲労が押し寄せてくる。今日の ore のヒットポイントは中屋敷のおかげでどん底だ。やつのチャリを借りるのもなんか腹が立つが、自分の家までおそらく五キロはある道を歩く気にはなれなかつた。

チャリを押して、玄関から門までの砂利を踏んで歩く。門柱の脇に、高さ数メートルのイチイの木があつた。赤い実をいくつもつけてまま、緑の細い葉を寒風に揺さぶられている。飾らなくても、このままでクリスマスツリーになる。自転車に跨り、イチイの木を見上げた。その枝の間で、なにかが揺れた。

二階の窓のカーテンだ。緑色のカーテンが割れ、そこに中屋敷が現れた。おれをみていた。視線が交わった感じはしない。中屋敷のいる二階の窓からは、おれの顔はイチイの枝の陰になつていてみえないのだろう。でもあいつはおれをみていた。

おれはペダルに乗せた足に力を込めた。ギアがぎちりと鳴いた。最初の角を曲がると、わざとらしくない程度に、振り返つてみた。中屋敷はまだ、窓辺に立つていた。

「わかりにくいんだよ、バカ」

焚き火の煙が薄く残るあぜ道を、チャリで駆け抜けた。なぜだか胸がドキドキした。

いつもと同じ朝がきた。

食事を終え、歯を磨き、しばし浴室で制服と向き合つ。クリーニングしたての黒い制服が、朝陽を受けてつやつやと輝く様を楽しんでいる、わけじゃない。睨み合っているのだ。といつか一方的に睨んでいる。

おれはこの制服が嫌いだ。

中学入学式のあの日、校門へと吸い込まれていく黒いヌーの群れを見たとき、おれはぞらりとした違和感を覚えた。初めての学校だし、そういうもんかとも思つたけど、張り出されたクラス分けを見て、教室に入り、同じ小学校で同じサッカークラブで、いつもバカばっかりしてふざけてた井上に、六年生のまんまのノリで話しかけたとき、違和感の正体をみた。

「菊池いー、いつまでも小学生やつてんなよー。もう中学なんだぜ。大人にならうよ、大人に」

そいつはおれの肩をぽんぽんと叩いて、にやにや笑つた。真っ黒の真新しい制服が、やけにピカピカしてみえた。

その十分後、入学式のため、全校生徒が体育館に並んだ。全員が一色に染まつっていた。黒だつた。右をみても、左をみても、知つていたはずのかつての級友たちは、別人になつていた。小学校の卒業式からたつた一週間だつた。

制服のせいだ。全員が同じ服を着て、同じ人間にならうとしている。まるで鎧だ。どんなに弱いやつでも、強そうに見える鎧。自分を隠して、敵を欺くための鎧。

吐きそうになつた。朝食べたものをリバースしそうになるのを、唇を咬み、拳を握つて、堪えた。自分が着ている制服を、その場で脱ぎ捨て引きちぎりたかったが、それも堪えた。口の中はすっぱくて、握りしめた手は痛かつた。

最初の紙飛行機を飛ばしたのは、その直後だつた。

そんときの担任は、大学卒業したての女の先生で、いつもおれに向かつてなんか必死に語つてたけど、おれは無視し続けた。夏休みが終わつてみたら、その先生は学校にいなかつた。

「逃げりやあいいと思つてる」

「弱いよなあ、大人つてやつらは」

「そんな大人になりたかねえよな」

「反面教師つてさ、こーいうこというんじゃね?」

「……勉強をしても、らつたな！」

「あやはははは」

学校とこり場所にとけ込めないやつらもやつぱりこるもんで、そんなんやつらの間で、おれはへラへラ笑つてた。へラへラ笑いながら、制服の色とか重みを必死に忘れようとしていた。

今日も、昨日と同じように制服と睨み合つて、まるでこれから戦に出陣するみたいな重い気持ちで制服に袖を通した。今日もそれはすしりと重かつたけれど、羽織るとき、ふわりと冬のにおいがした。枯れて朽ちた葉と、それを焼く煙と、弱い太陽と、乾いた風が混じり、淋しいのにどこかなつかしい、そんなにおいだ。小学生のこり、ねえちゃんにそれをいつたら「ポエマー？ くすつ」といやな笑い方をされたので、もう一度と口にしないと誓つた。

制服を着て、空っぽに近いカバンを掴んで、弁当だけをつつこみ、玄関でスニーカーに足をつこんだ。

なにか忘れてないか、おれ。

昨日、中屋敷のチャリを借りた。あいつを後ろにのせて、刈り取られた田んぼの中をずいぶん走られた。あいつが怪我なんてしゃがるから……思い出した怒りが、なにかと一緒に連れてきた。

『好きだ』

「わーつ！」

思わず耳を抑えて玄関に座り込んでいた。

告られたんだった。同じクラスの同じ男の中屋敷に、中一のときから好きだといわれてしまつた。

「どうしよう」

「うだ、どうすればいいんだ？」

昨夜は疲労が激しそぎて、夕飯を食いながらぼろりと茶碗を落とし、一番上のねえちゃんに殴られた反動で畳に倒れ伏し、そのまま眠りこけてしまつた。朝起きたら、自分の部屋にいた。綺麗をつぱり忘れていた。できれば忘れたままでいたかった！

「どんな顔したらいいんだ。つてかあのドア開けたら、あいつがいたらどうしよう。なんかいそうだよな。ああいうまじめそうなヤツに限ってストーカーとかすんだよな。あいつ絶対いるよー」

おれの中で被害妄想が眞実に限りなく近づいたき、天から怒鳴り声がした。

「ちょっと！ みっちゃん！ なにやつてんのよ、邪魔！ どきな！」

昨夜おれを殴り飛ばした一番上のねえちゃんが、ドカドカ階段を降りてきて、玄関に蹲り妄想に取り憑かれていたおれを突き飛ばし、体当たりしながらドアを開けた。

「あ！」

やめて、開けないで、といつ声は、ここの姉に届くはずもない。バンっ！

家が揺れた。ヤツはいなかつた。身体から力が抜けた。ねえちゃんの運転する車が、きゅきゅきゅーとタイヤを軋ませながら、車庫から飛び出していく。一番上のねえちゃんはとにかく凶暴だ。これが刑事なんだから、世の中恐ろしい。この市の犯罪率が減っているのが頷ける。

「みっちゃん、なにしてんの？ 玄関で座つてたら痔になつちやうよ」

白くて細い手があれの頭をふわりと撫でた。昨日、おれを学校まで運んでくれた一番前のねえちゃんだ。

「でもあたしが治療してあげるから、心配しないでね」

そういうて嬉しそうに笑うこの姉は、解剖がなにより好きだとう医大生だ。この家で魚をさばけるのはこいつだけ。

「今日も送つてあげようか？」

「今日はいいよ。友だちのチャリ、借りてるから」

「そななの？ ジャあ行つてきます」

白い手をひらりと振った。どれほど美しく見えても、あれが血に飢えた手だつてことを、おれたち家族は知つてゐる。おれはこの姉

も理解できない。

「みなと、凑、邪魔だ」

小さな足に、背中をがつりと蹴られた。振り向くと、ランドセルを背負つた妹がいた。

「はるや、おまえなあ。兄を呼び捨てにするなど何度いつたらわかるんだ」

「高校生にもなれないやつに、おまえ呼ばわりされる筋合いはない。湊みたいなやつを兄なんて呼べるか」

「・・・どこで覚えてくんだよ、そんな難しい言い回し。それになれないんじゃなくて、自主的にならないんだ」

「日本の高校進学率は、いまや九十七パーセントを越える勢いだ。あたりまえのことができないやつといわれるだけだ。高校もいかずに、湊はなにをするつもりなんだ?」

ぐつと言葉に詰まる。

「いつまでたつても、子どもだな」

「十歳の子どもにいわれたら、おれももつおしまいかな。

「おまえにだけはいわれたくねえぞーっ!」

赤いランドセルに向かつて叫んだけれど、完全に無視された。とても小学生にはみえない超現実主義の妹の夢は、政治家だ。初詣の繪馬や七夕の短冊に「政治家となつて腐敗した日本を救い、国民の辛苦を背負いたい」と書いた妹を見て、おれは日本の将来に大いに不安を抱いた。

一人の姉と妹に置き去りにされ、おれは玄関に鍵をかけた。両親は海外赴任中で、いまここに住んでいるのはおれたち四人だけだ。いつもの朝だった。違うのは、ここにある中屋敷のチャリだけだ。ポーチに立てかけた見慣れぬチャリに手を伸ばしたとき、ポケットの中の携帯がぶるつた。

『湊くん、おはよう。丘締まりきりんとね。庭にくる鳥のえさも忘れないで。高校のこと、はるきにきいたけど、行かないならこっちにこない? いとこりうだよー、自然がいっぽいで。今日もサイが

ね
・
・
・
ル

そりゃそりゃ

両親の赴任先は、アフリカの自然保護区だ。獣医師である二人は研究のため、もう一年もアフリカに行きっぱなしだ。おれ以外の姉妹全員がしつかり者のなので、なんの心配もしてないらしい。生来ののんき者夫婦は、地平線のみえるサバンナで、今日もライオンやシマウマたちと、心ゆくまで戯れている。

「当分、帰つてくる気ねえな」

毎朝とてく毎からの定期便を読み終えぬと、庭元ぐる鳥のために、ペーべづを散き、ソノゴの刃ひ身を枝に落す。

あまり普通でない環境なのだと思う。だからグレるんだと、一般常識のみで突っ込んでくる教師もいたが、おれはこんな家族が嫌いじゃないし、おれたちは意外とうまくやつている。おれからみれば、学校の方が異質なのだ。

中学の入学式で感じたあの違和感は、いまだにおれの中にこびりついたままだ。小学校卒業式からたつた一週間の間に、みんなはなにをなくしてしまつたんだろう。

おれにはそれがわからない。わからないから、立ち止まってしまつた。三年経つても、わからなかつた。誰も教えてはくれなかつた。いや、違うな。

撒いたばかりのパンくずをホオジロがつまみ、リンリンはメジロがたかる。いつも来るやつらだろ？ 警戒もせずに食べている小さな鳥たちを眺めながら、ふと自分を否定していた。

込んでもるんぢやないのか？

風が吹いた。自分の中を、新しい風が吹き抜けた気がした。
昨日と同じ朝なのに、なにかが違う。

『配られたプリントを紙飛行機にして飛ばしたとき』

あのとき、中屋敷の言葉で、おれの中のなにかが響いた。学校の中ではいつだってへラへラ笑つて、先生の声も、連んでいるやつら

の声も、ぜんぶ聞き流していた。中屋敷の言葉だけが、心を揺らした。

中屋敷のチャリに飛び乗った。えさをついた鳥たちが一斉に飛び立つた。その先の空は、深い蒼だった。

三、

「じゃあ、菊池んとは四人姉妹で住んでるんだ。そのお弁当は誰が作ってるの？」

「一番目のねえちゃん」

「ああ、医大生の。す」いね。「両親が獣医さんでお姉さんがお医者さんか。病気になつたとき、困らないね」

「いや、おれはあいつのいる病院だけは行かねえ」

「どうして？」

「これ」

おれは弁当箱から鶏の唐揚げを取り出して、中屋敷の田の前につきつけた。

「わー、チューーリップだ。遠足とかお誕生日会みたいだ。いいなあ、いつもこんな作つてもらつてるの？」

「よくねえよ！」これはあいつが自分で絞めて自分で解体した鶏肉だ！ 庭に散乱した白い羽をみたときのおれの気持ちがあまえにわかるかあー」

「菊池はそういうのダメなの？ そういうえば、ぼくが足をくじいたときも、ものすごいあわてつぱりだつたね」

「ダメ。もう絶対ダメ。血とかみたら倒れる」

あはははと中屋敷が笑つた。

あ、こいつの笑つた顔、初めてみた。切れ長の田が細くなつて、少し目尻が下がる。いつもの冷たい表情が崩れて、一気に年相応の顔になつた。

「菊池はおもしろいね。もつと早く、話しかければよかつたな」

中屋敷の言葉は、おれに触れては響き、揺さぶりをかけてくる。それは決して、嫌なものではなかつた。心地よく吹く五月の風だ。

いまはギンギンに冬だけど。

「おれみたいのと一緒にいても、いいことないぜ。血腫じやないけどバカだし。先生たちからも、もう見放されてるし。おまえも田つけられたら困るだろ。内申悪くなる」

「菊池はバカじやないよ」

あの田と同じ、まつすぐな田だつた。

「菊池はいいやつだ。一緒にいて、とても樂しこよ。菊池とこると、ぼくは」

「ちよ、ちよと待つた！」

思わず耳を塞ぐ。

「なに？」

「恥ずかしいから、そういうのやめろ」

「なんで？」

「なんでって、ふつー恥ずかしいだろ。ほめられたりしたこと、あんまないし」

「ぼくは、そんな菊池が好きだよ」

あの日を境に、おれたちはこんなふつに仲良しだ。といつても、二人の仲に甘い進展があつたわけではない。男同士でイチャつくなんて、冗談にもならない。ただ、一緒にいる時間が増えただ。それでも、これまでと違うなにかがあると、おれは感じていた。

時は優しく、けれど容赦なく流れしていく。

期末を目前に、教室に閉じこめられた生徒たちは、いつにもまして張り詰めていた。ベルが鳴れば、すつ飛んで家に帰る。塾に向かう。きりきりと絞られている。反対に、街はクリスマスに染まり、どこか浮かれている。色あせた赤と緑と金の旗が風に揺れる。中途半端なイルミネーションが、ところどころで瞬く。予算がないのが丸見えなクリスマス商戦だ。おれと中屋敷は、そんな商店街をそれ

ぞれ自分のチャイを押しながら歩いている。スピーカーから流れるジングルベルがどうにも恥ずかしくて、通るたびに苦く笑つてしまふ。

「菊池、なに笑つてんだ?」

「いや、べつに」

「もうすぐクリスマスだね」

「だな」

「菊池んちはクリスマスにパーティとかする?」

「まあ軽く」

「ぼくんちはね、サンタが三人も来るよ」

「は?」

「妹がまだ小さいからね。父と祖父一人が、毎年、張り切つていて。祖父たちにとつては、初の女の子の孫だからね。プレゼント争いも半端じゃない」

「うちの妹とは大違いだな」

「はるきちやんだっけ?」

「ちゃんなんてガラじやねえよ、あいつは。今朝だつて二コースみながら、出生率の低下と学習指導要領についてなんか熱烈に語つてた。最近は勉強が大事だといつてる高校生が増えてきたとかなんとかいいながら、さりげなくおれにフレッシャーかけてくんだぜ。あんな小学生、どこにもいねえよ」

「一度会つてみたいな」

「それもなんかこわいな。おまえら、気が合いそうだし」

中途半端にクリスマスな商店街を抜けた。橋がある。川の水音が聞こえる。ここがおれたちの分かれ道だ。おれは、橋を渡る。中屋敷は橋とは反対の方向へいく。土手の上でおれたちはチャリを止め、しゃべる。いつの間にか、日課になつていた。

土手の下は広く、川縁までの間に、市営のテニスコートや野球場、サッカー場なんかがある。今日は土曜日で、授業は午前中までだ。テニスコートも野球場もすでに使用中だつた。サッカー場では、市

にいくつかあるサッカーチームの一つが準備を始めていた。大きなバッグから、ボールがいくつも転がり出た。

「菊池、サッカーやってた?」

「え?」

「いつも見てるよね」

「そうだっけ」

「サッカー好きなんだね」

「なんでそう思う?」

「だつてそういう目でみてる」

どきりとした。中屋敷のまっすぐな目は、いつも自分の中にすりと入ってくる。そして、なにもかも掘み出されて、目の前に晒されそうになるのだ。

『大人になろうよ、大人に』

中屋敷の目は、入学式の日の井上を引きずり出した。

中学に入つたらサッカー部に入るつもりだった。レギュラーとつて、試合にもがんがん出るつもりだった。小学三年から始めたサッカーは、あの日、二度とやらないと決めた。

いまだからわかる。おれは、仲間だと思っていた井上に裏切られた気がしたんだ。些細な夢みたいな希望みたいなものは、井上の言葉で、簡単に砕け散ってしまった。バカみたいな理由だ。

井上はサッカー部に入つた。三年のときやつとレギュラーになって、夏の県大会で準優勝した。

サッカー部に入つていたら・・・グラウンドを見るたびに考えた。でもすぐに考えてもしかたがないことに気づいた。だからヘラヘラ笑つてた。

『なんでやめたの?』

中屋敷が問う。

『べつにー。部活とか熱血すんの、おれのキャラじゃないし』

中屋敷の前でも、笑つてみせた。いつもみたいに笑えばいい。どうせおれはバカだ。バカはヘラヘラ笑つてればいいんだ。

「なんで笑うの？」

中屋敷が額にしわを寄せた。

「なんでって、おかしいじゃん」

「菊池はそつやつて笑いながら、いつも苦しそうだよ」

呼吸を忘れた。中屋敷の言葉が大津波となつておれを掠つた。なにもかも飲み込まれて、笑うこともできなかつた。

土手の上を、向こうから犬を連れた人が歩いてきた。おれは中屋敷から視線を外した。

おじいさんだつた。ゆつくり歩くその年老いた人よりも、さらに遅い足並みで、綱に繫がれた白い犬が付いていく。よぼよぼという言葉がぴつたりだ。犬は下を向き、息をつく。おじいさんは時折そんな犬を振り返り、立ち止まる。犬がおじいさんの顔を見上げた。おじいさんが小さく声をかける。犬はまた歩き出す。幾度も繰り返す。おれたちのそばを行き過ぎるのに、たっぷり三分はかかつた。おじいさんと犬は、土手から離れ、橋を渡つていく。

「ずっと、一緒なんだね」

主語も目的語もなかつたけれど、中屋敷のいいたいことがわかつた。長い間、ともに生きていた。人と犬だけれど、そこに確かな繫がりがあつた。それがみえた。おれがみたものを、中屋敷もみたのだ。

「うん」

おれは失つていた言葉を取り戻し、頷いた。

「菊池」

おれは中屋敷をみた。

「ぼくは、きみと一緒にいたい。これからもずっと。年をとつてもずっと。だから、一緒に高校に行かないか」

「は？」

「菊池と同じ高校に行きたいんだ」

「なにいつてんだ、おまえ」

「菊池が高校に行くつもりがないつて、担任からきいた。でも、ぼ

くは

なにかが引っかかった。

「中屋敷、おまえ、突然、なに言い出すんだよ。おれが高校なんて、いまさらだろ。いい笑いもんになるだけだ」

「突然じゃない。ずっとみてたからわかるんだ。菊池はバカじやない。なのになんで、バカなフリをするんだ」

「フリじやなくて、マジなの。授業もつまんないし、つまんないから聞いてないし、聞いてないからいつも先生に怒られるし、怒られるとなんだか笑いたくなるんだよね。それにみんなもおれがバカやつてんのみて、笑つてんだからいいでしょ。」ううう役目も必要なんだよ」

「そうやって誤魔化すのはもうやめろよ」

おれは一步、中屋敷から退いた。

「なにがいいたい？」

「一緒に高校に行きたい。それだけだ」

「こんな中屋敷の目をどこかでみた。哀れむよつな、なにかを含む目だ。もうだいぶ前だ。いつだつただろう。記憶を辿る。

そうか、あのときだ。おれがいつもの」とく職員室に呼び出され、担任から長々と説教をくらつていたとき。中屋敷も職員室にいた。こいつは通り過ぎても、おれをみた。その目と同じだ。そのあと告られたんで、忘れていた。あのとき、こいつがいたのは・・・ぞくりとした。

土手の上を冷たい風が吹き抜ける。それよりももっと冷たい凍り付くような空気が、おれの中を流れた。

「おまえ、頼まれたんじやないのか」

中屋敷の表情が、ほんの一瞬、揺れるよつて崩れた。おれはそれを見逃さなかつた。

「おまえ、進路指導の先生んとにいたよな。それからおれをみた。覚えてるよ、おまえのあの田」

中屋敷が小さく身じろぐ。

「おれに高校行くよ」って説得してくれって、頼まれたんじゃないのか

「菊池」

中屋敷の声は掠れていた。それが答えたと思つた。

「だからおれに近づいたのか。ぜんぶ、嘘だつたんだな。好きだから告つたことも、ぜんぶそのためだつたんだ！」

「違う！」

「違わないだろっ！」

中屋敷が伸ばしかけた手をびくりと引いた。腹の底が熱い。

中学に入つてみたら、みんな大人になつていた。大人のフリをしていた。嘘で塗り固めた鎧を着て、にやにやと笑つていた。吐き気がした。そんな嘘が、溜まらなくいやだつた。だから紙飛行機を飛ばした。同じ色に染まりたくなかった。みんながなくしたもの、自分はなくしたくなかった。

「おまえもか、中屋敷」

声はみつともなく震えた。中屋敷はなにもいわなかつた。あの哀れみを含んだ目でおれをみていた。身体中の血が沸騰した。

「ふざけんな！」

中屋敷を殴ることもできず、逃げ出すようにチャリに飛び乗つた。ギアがかみ合わなくて、ガチガチと異音をたてた。構わずペダルを踏んだ。

ふざけんな、ふざけんな、ふざけんな。何度も叫んだ。きんと冷えた空気が、肺の内側を刺した。喉の奥がぎゅうぎゅうと痛んだ。

四、

「ちよつと、みつちゃん！ 泣きながら」飯食べんの、やめなさい。

「彌陶しい！」

一番上のねえちゃんが、ちゃぶ台をばんと叩いた。

「そんなこといったら、みつちゃんが可哀想よ。辛いことがあつた

のね

一番田のねえちゃんが、おれの頭を撫でる。

「やつやって女が甘やかすから、日本の男はダメになつたんだよ、おねえちゃん」

妹の言葉は今日も容赦がない。

おれは泣きながら、夕飯に出されたコロッケを必死に頬張つた。

「まったくどうしたのさ、みつちゃんは」

「チャリ漕ぎながら泣いてたよ」

「うわ、恥ずかしいやつ」

「いまどきここまで大泣きする中学生なんていないよね」

「みんな、ひどいわよ。泣けるつていうのは、心が健康な証拠なのよ。それに、ちゃんと食べてるし。これなら自殺の心配もないし、大丈夫。明日には元気になつてるわ」

「なにげにおねえちゃんのがひどいよ」

うちの女たちの会話は、幸いなことにほとんど耳に入らなかつた。おれの涙腺は、家に帰りつゝ前に、もう壊れていた。後から後から、涙が出た。悔しかつた。中屋敷との時間をちょっとでも気にいつていた自分が、だまされていた自分が、悔しかつた。あまりにも悔しくて、泣き続けた結果、またもや食事中に眠つてしまつたらしい。朝起きたら、そこは自分の部屋の自分の布団の中だつたけれど、なぜか右手に箸を握つていた。

制服を着るまでに、いつもの倍以上、時間がかかつた。袖を通した制服は、いつも十倍、重かつた。冬のにおいはしなかつた。

玄関を開けるとき、ほんの一瞬だけ、躊躇つた。でもやつぱり中屋敷はいなかつた。もし来ていたら、ほんの少し期待していた自分が、また悔しかつた。

「おはよう、菊池」

校舎の入り口に、中屋敷はいた。おれは中屋敷をみなかつた。視線を流した先に、いつも連んでいたやつらがたむろつていた。上履きに履き替えもせず、おれはそつちに向かつた。

「ちーすつ」

「みつちゃんじゅん」

「なんだよ、久しぶりじゅん」

「おまえ、中屋敷葉と連んでんじゅなかつたのか？」

「おまえの少し後ろに、中屋敷が付いてきているのを知っていた。知つていて、おれはいつた。

「そんなんじゅねえよ。あいつ別に友だちでもなんでもねえし

「なあーんだ、最近、すごく仲良しみたいだつたからさ、おれたち、忘れられちゃつたかもつて思つてたさ」

「おまえらの」ことは忘れらんねえよ

「なにそれー」

「愛の告白」

投げキッスをする。

「さやははは」

「キモイー」

背中を焼くよつに突き刺さつていた視線が消えた。ぜんぶ、終わつた気がした。おれは、また以前のようにならへらへらと笑つた。

期末が終わつても、三年生の教室に、開放感は訪れなかつた。受験まで、早い者はあと一月、公立を受けるものはあと三ヶ月もない。よりいつそう、緊張が増した。険悪な空気が流れることがあつた。そんなとき、おれは紙飛行機を飛ばした。返つてきたばかりの答案だ。点数は限りなく低飛行なのに、紙飛行機は天井付近まで上がり、ゆるゆると円を描いて飛び続けた。数人の男子が真似を始めた。教室は、崩壊した。

もうギリギリだつたんだらう。誰かの敷いたレールの上を、ぎゅうぎゅうに押さえ込まれて進んだかと思うと、無理矢理に進路を変更させられる。そこに自分の意志はない。意志など持つてはいけないのだ。これでいいんだと、自分にも嘘をつき、ただ進むしかない。みんなでへらへら笑つて、紙飛行機を飛ばした。先生が怒鳴つた。

おれがふざけて茶化すと、男子がもつと騒いだ。女子は迷惑そうな顔をして、おれたちを睨んでいた。

中屋敷は、俯いていた。教室の一番前の窓際の席で、顔をあげもせず、ただじっと座っていた。おれの飛ばした飛行機が、中屋敷の背中にあたつて墜落した。

「期末終わったし、どうかで遊ぼうぜ」

「おれんち来いよ、今日、親いねえんだ」

「いくいくー！ イブだしオールナイトで語ろうぜ」

「語るってなんだよ。そーいうのは女がやるもんだろ」

「いやいや、語りをバカにしちゃいけないよ、きみ」

「なにいつてんだ、こいつ」

「みつちゃんも来るだろ」

いつもの連中と、ジングルベルの流れる商店街を歩いていた。

「あー、ごめん。おれ、バス。今日、うちにクリスマスパーティやるんだわ」

「なんだ、それー。おまえ小学生かよ」

「おれじゃなくて、小学生の妹がいんだよ」

「いいねいいね、夢があるね。サンタさんが来るのを待つてたりするんだ」

あの妹に限つて、それは絶対にない。断言できる。でも、こうこうとき年下の家族はダシに使えるから便利だ。

「おれは兄として、妹を喜ばせなきゃならんわけよ。親もいねえしな」

「大変だなあ。おれ一人っ子だから、よくわからん」

「大変よ？ プレゼント買いにいくから、おれ、駅行くわ。じゃあな」

「がんばってー！ おこいちゅーん」

「バーカ」

「ぎやはは」

プレゼントを買つというのは、嘘ではない。毎年みんなでプレゼントを買い、クリスマスツリーの下に置く。二十五日の朝、みんなで開けるのだ。今年も両親はアフリカからプレゼントを送つてきた。去年のプレゼントは、マサイ族の真つ赤なマントだつた。当然、着たことは一度もない。今年も一番上のねえちゃんが仕入れてきたおれの背丈よりも高い生の木のみの木の下に、色とりどりの包みがいくつも置かれている。絵に描いたようなクリスマスの風景が菊池家の居間にはあつた。そしておれは、そんな風景をわりと楽しんでいた。電車に乗り、二つ先で降りた。大きなデパートはここにしかない。ものすごい人だつた。ジングルベルだの、赤だの緑だの、賑やかな音と色、そして人いきれで溢れていた。一番上のねえちゃんには、革の手袋を買つた。ときには犯人を素手で殴り飛ばすこともあるらしい。革手袋をしていれば拳も強固だ。一番目のねえちゃんには、有名職人が作成した包丁を買つた。小降りで軽いが、研ぎ澄まされた光を宿していた。きっと魚肉も美しくさばかれるに違いない。そして妹には六法全書を買つた。これは本人からのリクエストだ。本屋でこれをプレゼント包装してもらうのが、ひどく恥ずかしかつた。六法全書のせいで、ずしりと重くなつたカバンを提げて、おれは歩いていた。橋まで来た。もう陽が暮れるというのに、サッカー場では練習が続けていた。ここに来ると、どうしても足が止まる。そして、嫌でも思い出す。まだ思い出にもならないほど鮮明な記憶だ。

『なんでやめたの？』

井上の言葉は、ただのきっかけに過ぎなかつた。あんな言葉に碎かれるほど、おれのサッカーへの情熱も、続ける意志も弱かつたのだ。井上なんか、ただの言い訳だ。

『菊池と同じ高校に行きたいんだ』

県で一番の秀才は、学年でも下から数えた方が断然早いバカなおれにいつた。あり得ないだろ、そんなこと。中学入学式のあの日に蹠いたまま、おれの時間は止まつてしまつた。制服が重い。あの色に染まりたくない。なんで中学生になつたとたん、変わらなきやな

らないんだ。変わる必要があるのか。そんなことばかりに捕らわれて、気づけばもう中三だった。もうどうしようもないところまで来てしまったのに、いまさら受験？ しかもあの秀才と同じ高校？ おれでなくとも笑える。世の中はそんなに甘くないことくらい、はるきじやなくても知つていて。

キャンキャンと甲高い犬の声がした。

左手をみやる。小さな白い犬を連れた人が、薄闇の中を歩いている。子犬なんだろう。綱を引っ張つて、ぐいぐいと飼い主を引きずるよう、やつてくる。走りたいのだが、飼い主がそれに付いて来られない、そんな感じだ。犬の輪郭がはつきりとみえた。そしてその先にいた人を、おれは知つていた。

よほど老犬を連れたあの老人だった。おじいさんの手に握られた綱は一つ。その先の犬はどうみても子犬で、あの老犬ではなかつた。

その意味を、おれは理解した。

おじいさんを連れた子犬は、さつさとおれを通り過ぎ、橋へと向かっていく。おじいさんが「こらこら」といしながら、必死でついていく。おじいさんは笑いながら、愛おしそうに子犬の名を呼んだ。おれはおじいさんと子犬の姿がみえなくなるまで、視線を逸らすことができなかつた。

視界が揺れていた。いろんなものがぼやけて、ちゃんとみえない。代わりに浮かんだのは、中屋敷の顔だった。

まっすぐな目があれをみていた。冷静で大人びた顔が、ときどきふつと崩れて、笑う。子どもみたいに笑う。教室の中ではあまりみせない中屋敷を、おれはたくさん知つていた。中屋敷の言葉はいつも新鮮で、なぜだかおれの中にすんなりと飛び込んできては、おれの中で火花を散らしたり、すうっと溶けたりした。

『ぼくは、きみと一緒にいたい。これからもずっと。年をとつてもずっと。だから、一緒に高校に行かないか』

おれはあのとき、長年連れ添つたあの老犬とおじいさんのように、

おれたちもずっと一緒にいられるんじゃないかと、夢をみた。中屋敷の言葉だから、そう思えた。

だから、ほんとうは、嬉しかったんだ。好きだといわれたことも、同じ高校へ行こうといわれたことも、ぜんぶぜんぶ、嬉しかった。

もうあの老いた犬は、いないのだ。

もう中屋敷は、いないのだ。

涙が出た。泣いて泣いて、泣きまくった。疲れて土手に座り込み、それでも膝に顔を埋めて、泣いた。

「泣いてるの？」

声がした。

「菊池、大丈夫？」

中屋敷だった。本物の中屋敷が、おれと目線を合わせるようにかがみ込む。あのときと同じ声、同じ眼差しでそういった。

中屋敷があれの隣に腰を下ろした。おれは逃げなかつた。あのときの血のたぎるような熱は、たくさん涙と一緒に、流れてしまつた。

川はいつも通り、静かに流れていぐ。ときおり背後を、チャリや犬を連れた人が通り過ぎる。橋の上をヘッドライトをつけた車が、忙しそうに家路へと向かつ。

「「めんね」

中屋敷がいった。

「なにがだよ」

「先生から頼まれたの、本当なんだ。菊池がなんで高校受験しないのか、聞いてみてくれつて。クラスメイトなら話すかもつて。だから菊池に問い合わせられて、なにもいえなかつた。違うんだと、菊池の前でちゃんと否定できなかつた。だから、『ごめん』

「もう、いいよ」

「よくないよ。ぼくは本気だ。きみと同じ高校へ行きたい。それは変わらない」

まっすぐな眼差しがおれを捕まえる。どこまでも真剣で、搖るぎ

もしない。素直で、強い。子どものような眼差しだ。中屋敷は、小学生だったあの頃の率直さを持つている。なにもなくしていない。そういうやつだった。

自分が探していたものを、中屋敷の中にみつけた。答えはこんなところにあったんだ。

「おれの足はやつと、地についた。そんな気がした。

「菊池に渡そうと思つてたんだけだ」

中屋敷が自分のカバンを「じ」と漁る。中から取りだしたのは、クリスマスカラーの包装紙に包まれた高さ十センチ以上もある分厚いものだ。

「クリスマスプレゼント。前から準備してたんだけだ、渡せてよかつた」

重い。

「なに、これ」

「開けてみて」

「一十五日に開けるもんじゃねえの？」

「こつもの習慣で、包みを開けるのを躊躇つてしまつ。

「意外に堅いんだね、菊池は。今の世の中、融通効くやつが生き残るんだよ」

「はるきみたいなことゆーな。開ければいいんだろ」

バリバリと包みを破ぐ。十センチの厚みが、ぱらけた。

「参考書と、入学願書？」

中屋敷の顔をみた。

「一番近い県立だよ。試験日は三月十一日」

「だつておれ」

「菊池はバカじやない。そんなのみてればわかるよ」

「でも」

「ぼくが教える」

「・・・まだ、間に合つのか？」

「間に合わせるんだよ。きみがどうしたいかだ。菊池はどうしたい

？」

中屋敷が笑っていた。まるで雪が舞い落ちるみたいに、ふわりと笑った。おれはいつまでたっても言葉がみつからなくて、凍える指で、必死に入学願書を握りしめていた。

「なんなんだー！ これはっ！」

二十五日の朝、おれはクリスマスツリーのそばで、叫んだ。家族それぞれからのプレゼントは全部で五つ。そのすべてが、開けても開けても、問題集だつた。

「中屋敷くんつて子から連絡もらつたんだよ。みつちゃんが高校受験するから、みんなで協力してやつて欲しいって。これだけ協力してやるんだから、絶対合格しろ」

一番上のねえちゃんが、おれの背中をバンつと叩いた。

「な、なんだつて？」

「あの子、いい子ねえ。ぼくが必ずみつちゃんを合格させますからつて、うちに挨拶まで来たのよ」

一一番目のねえちゃんが、おれのあげた包丁を朝陽にかざしてうつとりと眺めながら、とんでもないことを呴いた。

「どうせ高校行かない理由なんてなかつたんだろ、湊は。友人に背中を押されなければ動き出せないところが情けないが、まあいいだろう。ところであの中屋敷というのは、なかなかいいぞ。これから日本の日本を支えるには、ああいう男子が必要なんだ」

「ちょ、ちょっと待て！ なんで中屋敷を知つてんだよ。しかも全員！」

「電話をくれたんだ」

「うちに来たわよ」

「うちの小学校の門で待ち伏せされた」

三姉妹が口を揃えた。同時に携帯がぶるつた。

『みつちゃん、恋人できたんだつてー？ 中屋敷くんて格好いい？

写メ送つて~』

がつくりと置にひれ伏した。

おれは知らなかつたのだ。あいつを甘くみていた。おれのいる周りではぜつたに動かなかつたくせに、陰で確實に手を回してやがつた！ 狡猾で、隙がない。あいつこそ真のストーカーだ。どこが小学生みたいに素直なんだよ・・・おれってマジでバカ？

中屋敷の笑顔を思い出した。それが急に、悪魔の顔になつた。おれはもう取り返しのつかないところに来てしまつたのだと、本当に悟つた。

「高校なんて、行きたくねえ」

ぼそりと呟いた本音は、もう誰にも届かなかつた。

(了)

(後書き)

読んでくださってありがとうございました。わたし的には湊の姉妹がお気に入りです。母も好きです。窓を見上げちゃう中屋敷も好きです。ちょっとでもおもしろいなと思っていただけたら幸いです。ご感想とかいただけすると励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0803p/>

紙飛行機の飛ぶ先に

2010年12月11日09時55分発行